

第7号

ゾー

ゾーエー



人工知能的あるいは自然知能的な「金槌の頭をちょっと緩くする」ことが天然知能を受けいる上で必要となる。天然知能は「向こうからやってくるものをうまく召喚させるようなすき間」(郡司)をいかにつくるかが肝要なのだ。(『芸術を懂れる哲学』より)

天然知能的感覚において一・五人称ということが言われているがそれは「わたし」と「他者」(完全に理解出来るものではないから1ではなく0.5なのだろう)が一体となっている。「つまりわたしは、むしろわたしの内部に、外部・他者を内蔵している」(64頁)ということなのだ。

この著作で貫かれている姿勢、それは郡司の人工知能への批判だ。人工知能は宮台真司(社会学者)の言葉を借りれば「コスパ野郎」であり、それこそ一人称的視点しか持ち得ない金槌頭だ。そこに他者性を自らの内に受け入れるという姿勢はない。

「一人称＝三人称的知性(自然知能)は、各々自分のための世界を構成しながら、一人称＝三人称的知性の全体が、〈私たち〉という権力構造を立ち上げることを信じ、幻想としての世界を信じるのです」(79～80頁)。これは明らかに問題解決型(官僚的)思考への批判であり、それに対抗するものとして「問題・解決の単純な一致でのみ成立していない」天然知能を掲げるのだ。

では改めて天然知能とは何なのか。先程も書いたようにそれは「他者」を自らに受け入れることであり、「異質なものの到来を待つ存在」としての我々を指す。天然知能は同定することをしない。これもまた重要なポイントである。芥川龍之介の『手巾』という短編が引き合いに出されているが「〈通常、そう考える〉という発想は、〈私たち〉という共通の場を開き、思いやりの場を開くように思えます。しかし共通の場を指定することは、特定の解釈を断定し強制することになりますから、一人称的知性に他ならない」という(39頁、太字は郡司による)。天然知能、つまり「一・五人称は、〈何だろう〉だけです。亡くなったばかりの我が子のことを淡々と話す母親、という〈わたし〉の知覚に自身が持てず、訝しく思う。それが一・五人称的知性」(40頁)なのだ。

郡司は既出の対談で保坂和志の次のような指摘に「まさにそれが一番言いたいことなんです」と言っている。つまり『天然知能』全体は受動性の肯定で、これがまさに芸術につながるところですよね。なにかを〈自分の意志でつくっている〉なんて思っているのはろくなものではない。このことは全ての人に通じることだなと思ったんです」(対談155頁)。

ショーペンハウアーの「盲目意志」はペシミズムだが、郡司はペシリストではない。「人工知能の発達によって、定量化し評価し比較する能力主義が全面化する今だからこそ、天然知能は意味を持つのです」(234頁)。殺伐とした効率化の世界でこの「天然知能」という概念が一つの強力なアンチテーゼとして機能する。

2月26日の読書会で郡司ペギオ幸夫の『天然知能』について意見を交換しました。自分の学科の先生の本が読書会で取り上げられたのがすごく嬉しいです。なぜこの人は理工にいたのだろうかといった声がありました。確かに、本では科学実験よりも思考実験を紹介することが多いです。一般に向けた文書は特殊な環境が必要な科学実験より椅子に座ったまま行える思考実験の方が伝わりやすいのだと思います。なぜ理工にいたかは本人に聞かないと分からないかもしれませんが、ここでは理工学術院にいる私がなぜ郡司先生の考えに注目しているかを書きます。

郡司幸夫先生は東北大学の理学部出身で、古生物学や地球惑星科学を勉強していました。現在、早稲田大学理工学術院基幹理工学研究科表現工学専攻の教授です。生命表現が専門です。「生命表現って何？」ってなりますよね。

まず生命の定義が難しいのです。普遍的で例外のない正確な科学的定義はないです。例えば移動ができ、成長し、生殖するものを生命とすれば、コンピュータウイルスも生命だといえるが果たしてそうだろうか。あれ、普通のウイルスは生きているのか。郡司先生の生命理論：生成という存在態では「生成を担う様相、出来事、事物、その全てを生命と呼ぶ」と書いてあります。キーなのが「生成」です。郡司先生は生成の三つの様相を起源、規範性（自明性）および変化としています。例えば社会の出現、秩序、変遷。正直まだまだ私は郡司先生の生命理論を理解し切れていません。秩序と無秩序を行き来する意識の考え方や局所的にエントロピーに抗うシュレディンガーの負のエントロピーの考え方とは親和性が高いのではないかと考えています。郡司先生の研究を理解するのに重要だと思うのが生命を有機的組織体に限定していなくて、それを単純に一般化し抽象化した概念でもない事だと思います。

郡司先生の表現の定義を知るのに『共創=表現耕法の意味論：「わたし」の内在と解体』をお勧めします。一般的には考えや思いといった内側にあるものを絵や音楽などの自分の外にある世界に顕在化させる行為を表現というと思います。ですが郡司先生は、想定できない外部と付き合い続けることが表現だということです。Duchampの「泉」という便器にサインした“だけ”の作品を例にして説明しています。「泉」というのが作家の内にある意図で、「便器」は外にある実現。そのギャップによって召喚されるギャップを埋めようとする運動が表現なのです。作家が作る意図と実現のギャップを埋めようとする人だけが作品を体験できます。作品は人を選ぶ。とこのように郡司先生は表現というのを説明しています。

生命表現学とは、生物における表現。郡司研究室では生物が想定外な振る舞いをする仕掛けに置かれた生命体の実験を行なっています。それは例えば回転する大地に置かれたアリや因果律の反転を許容する群れのモデル、世界に対する能動性・受動を反転した実験環境下に置かれた身体です。

私が所属する研究室のコンセプトは次のようにHPでは説明されています：

「身の回りにある慣れ親しんだ人工物や身近な自然物を注意深く観察し、それらの対象と近いけれど異なる概念を念頭においたさりげない制御を施すことで、よく知っているはずの対象の思いがけない振る舞いや潜在的な可能性を引き出し、対象への固定概念を揺さぶるAlternative Beingsというコンセプトに基づく研究や作品制作を行っている」

つまり機械や情報技術における表現を行なっています。よく知っているはずの対象への固定概念を揺さぶるための仕掛けを考えるにあたって、郡司先生が語る外部との邂逅の思想に惹かれます。

私の学部の研究プロジェクト「生きた冠毛」は、タンポポの冠毛を帯電させることで、立つ・飛ぶ・横たわるといった重力に抗う振る舞いを可能とし、冠毛が生きているかのように感じさせる仕組みの研究・作品製作でした。装置にタンポポのもふもふを置き、それらが立ったり・飛び跳ねた時に、鑑賞者は生きてると感じたり・感じなかったりします。そもそもタンポポのもふもふって生物学的に生きてるものなのかとか「生きているもの」と「生き物」は別じゃないか、などと色々思考する者もいれば、かわいいとしか言葉では言いえないが惹かれる者もいます。くだらないと思い全く鑑賞できない者もいます。表現（意図と実現のギャップを召喚する装置）としては成功だと思います。

郡司先生や橋田先生がなぜ理工学術院にいる（必要とされている）のは表現というのを生物学や情報学・機械学といった専門知識が必要な領域で行なっているからではないかと思います。知らない世界を知ったりより良い世界を作るため以外に、表現するために理工学術院で研究をしている先生方がいます。郡司先生と意識科学に関する書籍と文献を読む来期の授業、Lecture on Representation Structure Theory（表現構造論）が楽しみ！

参考文献

- 郡司ペギオ幸夫 生命理論：生成という存在態 (2006)
- 郡司ペギオ幸夫 共創=表現耕法の意味論：「わたし」の内在と解体 (2019)
- 郡司ペギオ幸夫 Yukio Pegio Gunji - CONCEPT
<http://www.ypg.ias.sci.waseda.ac.jp/CONCEPT.html> (Accessed 2021/03/14)
- 橋田朋子 Tomoko Hashida Lab - About <https://tomokohashida.tumblr.com/about>
(Accessed 2021/03/14)

ニーバーの「光の子」の説明を読んでいて、私は第二次大戦を結果的に招いてしまうことになった「ダーリントン・ホール」に集うイギリスの「アマチュア」政治家達の姿を思い浮かべる。ノーベル賞作家カズオ・イシグロが『日の名残り』で描いた人々である。彼らは見事に「闇の子」、つまりファシズムという名の野蛮の台頭を理解することが出来ていない、否、理解しようとしないうめたき人々、つまり理想主義者(イデアリスト)としての「光の子」である。(因みに、彼らがあまりにおめでたいので現実主義的なアメリカのルイス議員は大変浮いた存在になっているが、彼が戦後この屋敷の主人となるオチまで付けていることは実に巧妙だと思う)

ナチズムに象徴されるファシズムに堕することが愚かなことであるのは自明であるとされるが、ニーバーに言わせればデモクラシーを「盲信」するのもそれに劣らない(やや扇動的なものを感じもする)。闇の子・光の子、どちらかに振り切るということがあってはいけないのである。つまりデモクラシーにせよ、「蛇のような賢明さと、鳩のような柔和さ」が同時に必要となるのだ。

バイデン大統領が就任演説で民主主義は傷つきやすいということを言っていたが、まさにその通りであり、一部の暴徒による国会議事堂襲撃事件は衝撃的だった。死者をも出してしまったあの惨状を引き起こしては流石に「国民としての権利を行使した」などとは主張出来まい。対話という民主主義の原理が根本から覆されてしまっている。

ニーバーは最終的に世界共同体、世界の連帯ということを重視しデモクラシーという政体そのものを否定することはしない。しかしそこには先程も指摘したように「蛇」の視線が必要となるし、「宗教的謙遜」というものがなくてはならないと言う。

「(宗教的謙遜は)最高の成果に達してもなお、人間生活は罪深い墮落に染まっているということを理解させる、キリスト教信仰は、世界共同体の水準においてもなお、新たな墮落があるということによって、単純な理想主義者のように絶望に落ち込むことのないように、人間をして準備させてくれるのである」(185頁)。

宗教的謙遜というところまで来て私はやや首を傾げたくなる。『リチャード3世』の舞台をホワイトハウスにしたドラマ『ハウス・オブ・カード』(Netflix)で登場する牧師も当選した議員たちに謙遜を説く。「民主主義にも蛇のような賢さを」と説くニーバーにはリアリスティックな感覚を覚えたが、宗教的謙遜という結論には煮え切らないものを感じてしまう。ただこれは『生きる勇気』で有名なあのP.ティリッヒの思想を受け継いだものであるようだ。この「宗教的謙遜」をめぐる評価は彼の思想を紐解かねばならない。(続)

2020年度読書会ラインナップ

学生委員

《2020年度》

・2020年1月

大江健三郎『セブンティーン』・『政治少年死す』 1月29日

・2月

グレアム・グリーン『権力と栄光』 2月28日

・3月

和辻哲郎随筆集 @鎌倉・東慶寺

・4月

朗読会 鴨長明『方丈記』西郷信綱『日本文学の古典』 4月27日(オンラインでの開催)

・5月

無し

・6月

無し

・7月

J・S・ブルーナー『教育の過程』 8月1日

・8月

朗読会 8月22日(村上春樹、夢野久作、坂口安吾、アラン・ポー)

ハンナ・アーレント『What is Freedom?』(原典講読) 第1回 8月29日

・9月

ハンナ・アーレント『What is Freedom?』(原典講読第2回) 9月25日

九鬼周造『「いき」の構造』 9月29日

・10月

(10月3日 OBOG会)

ハンナ・アーレント『What is Freedom?』(原典講読第3回) 10月26日

・11月分

ガヤトリ・スピヴァク『サバルタンは語るができるか』 11月29日

マクタガート『時間の非実在性』 12月7日

・12月

アントニオ・グラムシ『グラムシ・セレクション』 12月22日

E・フロム『愛すること』 12月28日

《2021年度》

・2021年1月

吉本隆明『共同幻想論』 1月30日

・2月

郡司ペギオ幸夫『天然知能』 2月15日

ニーバー『光の子 闇の子』 2月22日

・3月

森本あんり『不寛容論』 曜日未定

《感想》

2020年度を振り返ると、15作品以上を扱っていました。コロナで混乱した春学期を除くと毎月コンスタントに開催することができていました。ジャンルについても割と幅広くチョイスできたのではないかと思います。

一方で、参加者が限られていたのが課題です。今年度は「輪を広げる」をスローガンにさらに多くの人に読書会の場を開いていこうと考えています。4月には、舎生の新里君が最近読んでいるという三浦綾子の作品を読んでみようと考えています。

2021年度も引き続き読書会をどうぞよろしくお願いいたします。

建築学生の作品紹介「資料室に籠って作っているものとは」

菅家結

こんにちは。3年生も終わりを迎えようとしている菅家です。このコロナ禍の一年、私は信愛学舎の資料室、図書室とも呼ばれる奥の書斎のような一部屋によく籠っていました。私がそこで、なんらかの建築の作品を創作していることは舎生全員が知っていると思います。しかし、何を作っているのかを詳しく知らない人もいるかもしれません。ここで少し作品紹介をしたいと思います！

さてさて、これまで私が創作した作品数は幾つなのでしょう...。入舎してから数えるとおおよそ14作品です。なかには共同作業として大会議室を使わせていただいたこともありました。コロナ禍の前は泊まり込みで作業させていただき、学内一位のプロジェクト評価を取ることもできたほど、信愛学舎は建築学生にとってありがたいすぎる作業場所となっています。特にコロナ禍の一年は、本来3年生から使用できるはずだった学校内の作業場所が使えず規模も大きくなる模型作成の作業場所として書斎を非常に活用させていただきました。そして完成した様々な作品をいくつか解説していこうと思います。



これはカンボジアの小学校の模型です。母校ですね。

ではまず、学内一位をいただいた友人との共同調査の様子です。この課題は早稲田のポテンシャルを見つけるという設計課題の前段階、敷地分析の課題でした。私たちはドンキ・ホーテの裏側にある戸山3丁目の住宅地の敷地を「間合いの再編」と題して分析を行いました。この住宅地は将来的に戸山公園の一部として公園化する計画が新宿区のマスタープランであるので、土地が空き次第次の建物を建てることができず、空き地のような小さな緑地が点在しています。戦後に住み着く人たちの領域とこの緑地が間合いとして住宅地を構成していることに着目し、評価された作品です。信愛からも近いこの住宅地、皆さんもぜひ見てみてください。春にはこの緑地に多くの花が植えられてとても綺麗ですよ。また、anc.coffeという小さな可愛いスコーン屋さんを見

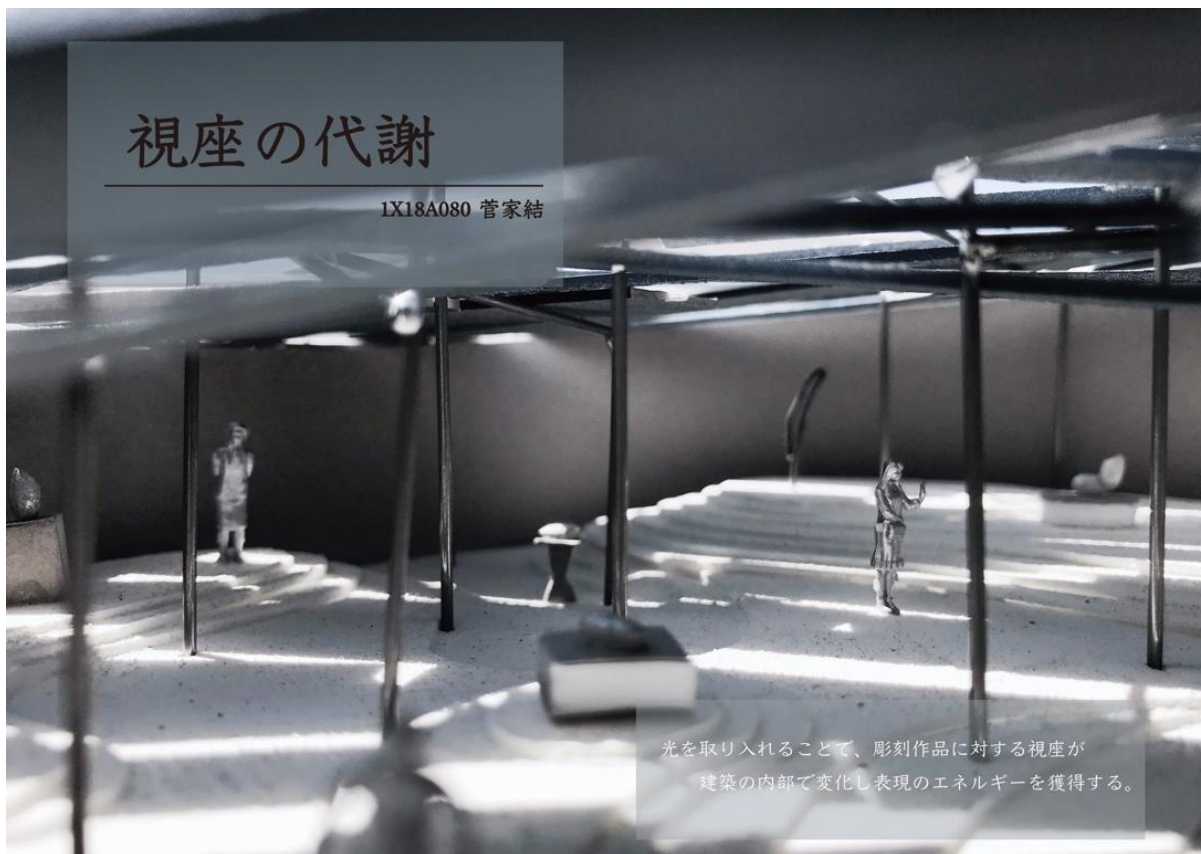
2年生後期共同敷地調査および集合住宅設計課題
「早稲田のまちのポテンシャルを開拓する」

第一課題：戸山三丁目の共同敷地調査
加藤彩那 符原瑞生 菅家結

これは3年生の前期の美術館課題ですね。北海道モエレ沼公園にブランクーシの作品を展示するための空間で、とても難しい課題でした。モエレ沼公園はイサム・ノグチというブランクーシの弟子が幾何学的に設計した公園だったので、土地と展示物、2人の偉大な芸術家に挟まれて設計する難しさがありました。光を用いて2人の彫刻家の表現技法を混合した空間設計を行い、学内3位、建築新人戦という全国の建築学生の登竜門であるコンペの100選にも選ばれ、大阪で展示しました。郵送費2万円自己負担が痛かったですが…。

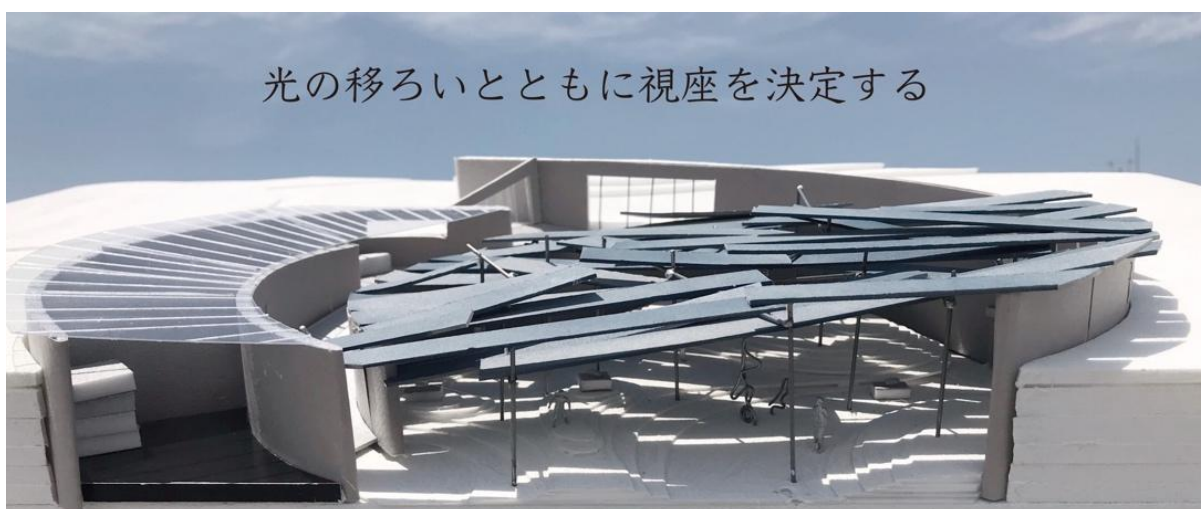
視座の代謝

1X18A080 菅家結



光を取り入れることで、彫刻作品に対する視座が
建築の内部で変化し表現のエネルギーを獲得する。

光の移ろいとともに見座を決定する



設計背景

ブランクーシの作品を展示する美術館を、彼の弟子であるイサム・ノグチが設計したモエレ沼公園に設計する。
二人の作品の表現の特徴を表す展示空間を提案する。

イサム・ノグチ

「目が止まったら困る」
動的な視点の移動によって
特定のパスを決めない

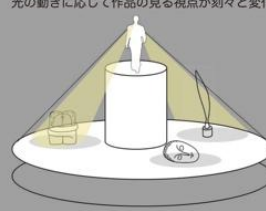


コンスタンティン・ブランクーシ

特定の視点を自身で選択
写真によって彫刻の両義性を表す
特に光の表現が際立つ

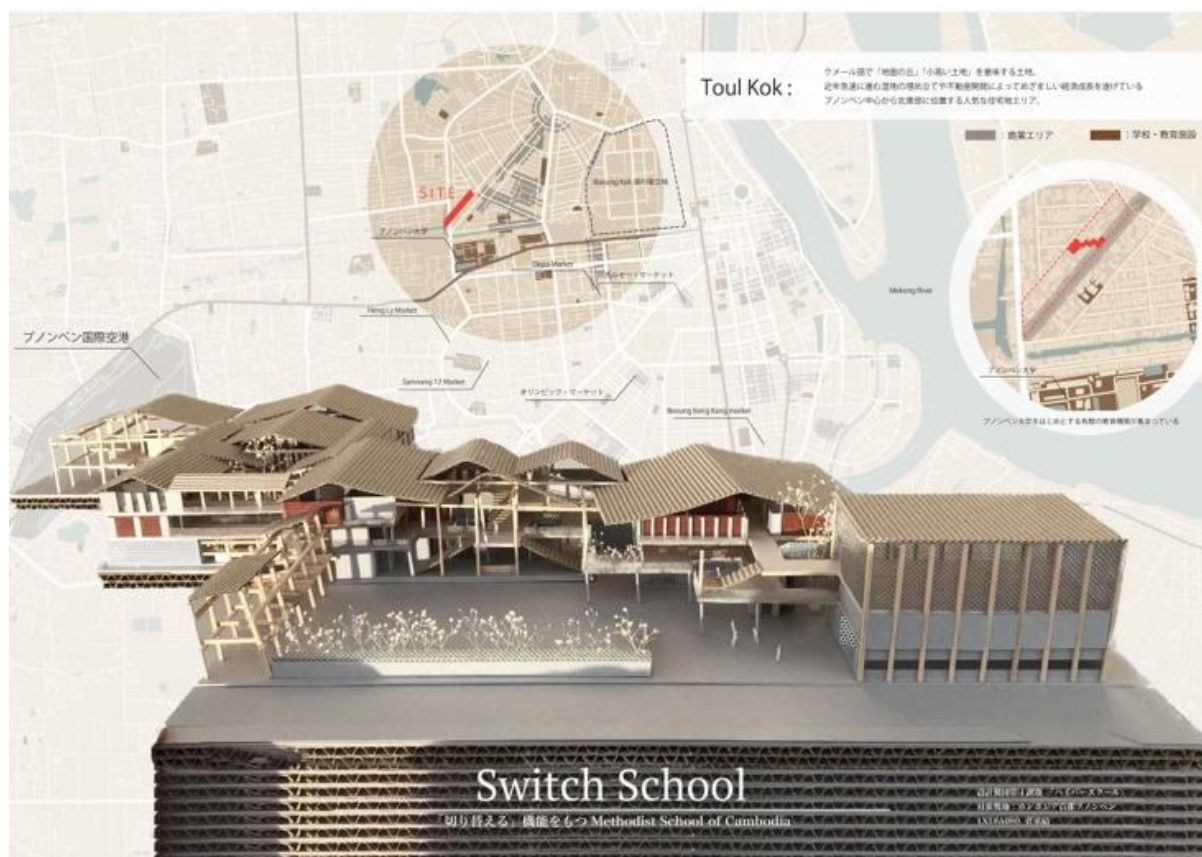
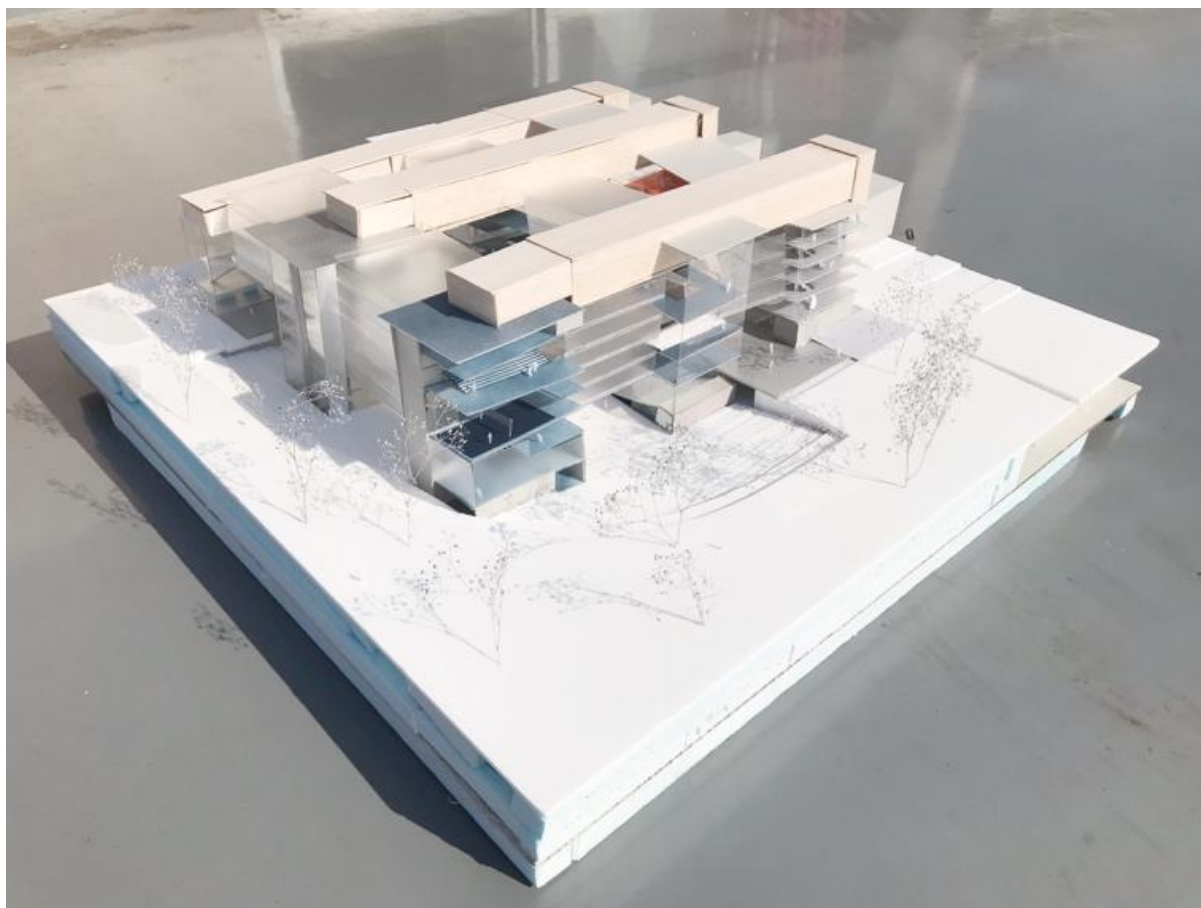


イサムの『作品を見回す』大空間による展示にて
ブランクーシが写真で用いた『視点の選択』を
『光が射す』ことで視点を導く。
光の動きに応じて作品の見る視点が刻々と変化する。



次の二つの課題は敷地が早稲田なので軽く紹介します。上は早稲田松竹の建て替え計画、下は理工キャンパス脇の戸山公園の隣の敷地にイノベーションビレッジを設計する東京ドーム1個分の規模の建築物です。信愛の屋上は模型写真を撮るのに最適なのです…。





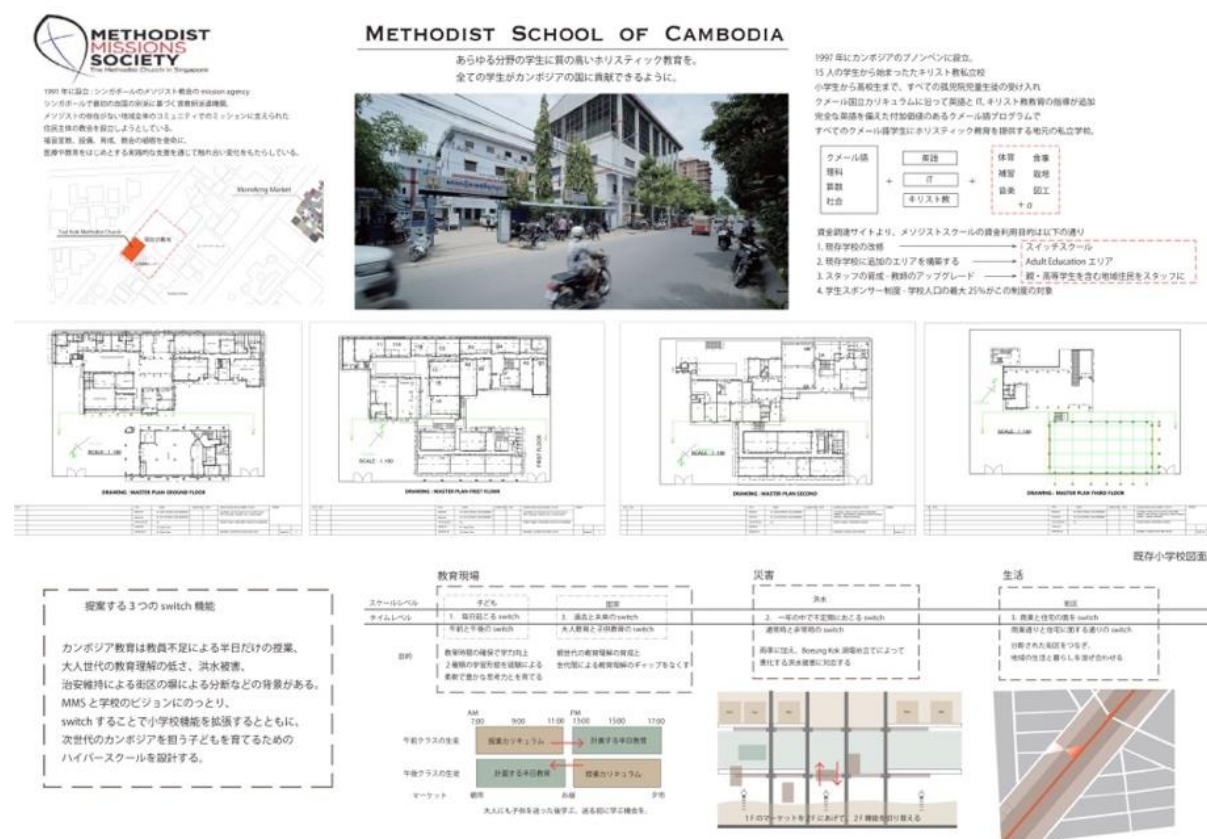
そして、直近の作品は自分の出身小学校を設計するという早稲田の伝統課題「ハイパースクール」です。私の出身小学校はカンボジアのプノンペンにあるキリスト教系の現地校です。

これは非常に思い入れの深い作品となっています。カンボジアの教育はポルポト政権の時代によって大人世代の教育者が乏しく、子供の数に対して教師が不足し、労働条件もよくありません。なので、教育は半日の交代、入れ替え制によって教育を受けられる時間が限られています。この残りの半日の過ごし方を切り替えること、プノンペンの都市の洪水問題をピロティ空間のマーケットを洪水時簡易な床増築で切り替えること、住宅と商業の分断された街区を切り替えることなど周辺環境を考え、「switchする」ことをコンセプトに設計しました。

都市や社会問題など、建築のアプローチは幅広く、色んなスケールから検討して全てのスケールに対する回答のような設計を目指してしまう自分の設計の癖は時にうまくいかず、難しいものでしたが、この課題に関しては自分のその想いも先生方にも理解してもらえ、最高評価点もいただきとても嬉しかったです。ちょうど担当していた信愛の聖書研究のテーマも貧困についてだったなど、その時の自分の思考と課題のテーマがリンクしていました。

以下はデザイン演習の各作品紹介です。

以上で作品紹介を終わります。ご覧いただきありがとうございました。



今年10戦10敗なのよね。今のところ。この前の晩の話。

三木遼大

さっきのアガったなー。水面爆発って初めて見たわ。あいつも食うの下手だし、俺も確信が無かったのよね。ルアーがな、水面ふよふよ～ってしてるところで、なんかぬるっと重いぞな。なんだこれ。うんうん言ったらバツシャーン来てな。はえ、でっか。1アクション入れればよかったな。ルアーの動かし方はあれでいいってことだったわけな。ふむふむ。それで30分場を休ませてもう一回だな。

さて一、同じように、上流側にキャストして流れるまま糸ヨレを巻き取っていく——。ルアーが下流に行く前にゆっくり回収。丁度街灯と橋脚で明暗ができるポイントを狙いすませよ？ Okay、この一投。場を休めたリスタート一投目しかねえ。魚の引き波も視認できるから状況は悪くないはずだ。“一カンカン”、甘噛みみたいなショートバイトが数回。もっとガッツリ食ってこいやボケがあ。ビックバイトを待つ。待つ。待つ…。もう待てん。

まじか、がつつり食ってくる感じが無い。ショートバイトで強引に合わせるしかねえ。岸まであと4メートルくらいしかない、ストップアンドゴーの猶予がない。これ以上は竿がルアーを動かして見切られるッ。

今か？ いまか...？ クソ、わかんねえ。意を決して竿を合わせる。やけくそだッ“上にッ”。

どうだ？　口に掛かったらその瞬間魚は暴れる。それが無ェッ。畜生、スレだ、スレ掛かりだッ。まったりした重みが前腕に乗る。岸壁まで引っ張り切れればタモでワンチャ——あ“あ”ツツ

スィー

・・・。ツきしょお・・・。

あほか。上に合わせてどうすんじやい上によお～。いやテレビが悪いね。あいつら掛かったら上に竿振ってるもん。じゃないわ。言ってる場合か。はあー。この後はガン下げの潮止まりや。ここじゃ浅すぎる。あーあ。鏡面に映る月がきれいだなあああああああ。

たばこすってかえりますた。

まあね。就活も終わっていいよ暇になった時に本格的に始めたのが釣りですわ。飲み屋が8時で終わるっていうもんだから、外で夜まで遊ぶにはうってつけだったんだよね。アルコール飲めない友達と遊ぶ頻度が増えたのは面白かったよね。12月は夜3℃とかだったけど。それで釣れねーし。1月も風が強くて死にそーだった。案の定釣れない。

まー、釣れない時間が3、4時間続くんだけど、不思議な時間だね。結構楽しい。沈黙のあとに思い出したかのようにしゃべったり。鈴が鳴っては「お」とか言って。んで「はい」とか言って。

素面だけど、釣れなくて頭おかしくなってるから、会話が盛り上がるんだぜ。もるひね。

園芸・建物修繕計画についての報告

松村いつみ

寮に帰ってきたとき、きれいなお花が目に入るとそれだけで少し心が和むことがあります。他にもキッチンのテーブルや床が綺麗だった時、屋上に出たら天気良くて暖かった時…。そんなちょっとした良いことが増えたらいいなと思い、いろいろと手を出している次第です。

【園芸】

今年度は裏庭でほうれん草や小松菜、大根の栽培、正面玄関では春に向けて花の植え替えを行いました。

菜園についてはお正月ごろに収穫できる予定だったほうれん草や小松菜が未だに収穫できず、最近ようやく大きくなり始めたところです。4月頃には収穫できるかと期待していますが果たして美味しいのでしょうか…？ 種を蒔く時期が遅かったこと、肥料が足りなかったことなどが原因かと思っています。菜園もなんとなくでやると上手くいかないものだと反省しています。春夏の植え付けは4月に入ってからになります、次回は計画からもう少し丁寧にやっていこうと思います。

玄関の花についてはもともと植えていた花にさらに新しい花をいくつか加え、かなり華やかになりました。駐車場を利用している方にも褒めていただけて嬉しい限りです。今後について、玄関回りの3つの花壇にはそれぞれに切り株が残っている状態です。本当は全部抜いて新しく木を植えるなり花を植えるなりしたいのですが、なかなか手を出せずにいます。切り株を除去する方法はいろいろあるようですが、穴をいくつか開けて岩塩を入れ、蟻でふさいで放置するという方法などは結構面白いのではないかと思います。やってみたい方、ぜひ声をかけてください！

【建物修繕計画】

2013年にリフォームが行われた信愛学舎ですが、古くなってしまったところがまだまだあります。小さな修繕として階段の修繕を3月中に、換気扇の清掃や網戸の取り付けを4月以降順次行っていく予定ですが、加えて長期にわたる建て替え計画も理事会の方々とともに進めていく予定です。この建て替え計画の背景には、これまで1年ごとに共益費が値上げされていたもののどのように使われているのか寮生が把握できていなかったという問題があり、お金の動きを明確にしたいという意図があります。また建て替えという大きな目標をより現実的にするためにもきちんと動き出したいと思っています。3月から動き出す新しい企画なので、力を貸してくれる寮生は声をかけてくれると嬉しいです。

↓上から、ほうれん草、花壇、いちごのお花



《犬好きの犬好きによる犬好きのための映画『バレット・ヘッド』》

新連載トラッシュムービーがとうとう始まった。発端はキッチンで何気なく見ていたある映画があまりにもひどすぎて、ネタとしてゾーエーに載せようという話になったこと。毎回、担当者が出会ったトラッシュ(ごみ)のような映画、観て人生の時間を奪われたと嘆きたくするような映画を紹介していく(予定)。

まず「トラッシュムービー」がどのような映画のことを指すのか、少し明確にしておこう。映画が発明され、一つの芸術産業として認められてかれこれ100年ほどが経つが、その間に古今東西で様々な映画が作られ、その数もかなりのものになる。当然その中には涙ちよよぎれる感動作、社会を強烈にえぐるような問題作、また戦意発揚のためのイデオロギーがかった映画などその内容と形式は多岐にわたっている。その中でも特異な位置を占めるのが、Z級や本誌では「トラッシュムービー」とされている映画たちである。低予算、無名なキャスト、時代遅れの技術を駆使して、本気とも皮肉ともおふざけとも取れるようななんとも言えない映画を作り出す。はっきり言って、中身も監督の趣味の押し付けや、やりたいことをただやりました的な映画が多く、だいたいクソ映画である(例えば、同じような話の繰り返しで、ただ人食いザメの頭の数が増えるだけでシリーズ化されている某サメ映画など)。それらを決然たる意志を持って、トラッシュだとバツサリと切り捨てるのが本連載の目的である。映画という芸術形式の品格を貶めるような諸作品に対して、死亡宣告書をつきつけること。それができれば私のトラッシュムービーに費やされた貴重な時間たちも本望であろう。

前置きが長くなったが、ようやく今回紹介する映画の紹介に入る。冒頭で述べたこの連載の発端となった記念作、ポール・ソレット監督の『バレット・ヘッド』である。まずなぜこの映画を見る気になったか。その理由はトラッシュムービーにはあるまじき豪華俳優陣である。『戦場のピアニスト』のエイドリアン・ブロディ、ジョン・マルコヴィッチ、さらにはアントニオ・バンデラスさえ出ている。流石にこのメンツでがっかりさせるような映画ではないだろうと興味本位で鑑賞。しかし、実際はお粗末な筋と、微妙なアクションによって見事なまでにトラッシュであった...

まず、この映画のパッケージには先に挙げた3人が銃を握って、熱いアクション映画のような図柄になっている。実際はバンデラス以外の二人が銃を撃つシーンはない。もとい、銃を握るシーンでさえない。明らかに虚偽広告だ。

ストーリーとしては3人の強盗が警察に追われ逃げ込んだ倉庫が、実は元闘犬場であり、そこには捨てられた凶暴な闘犬が闊歩していた。そして3人が、恐怖の闘犬から何とかして逃げようとするというものだ。以上。これ以外に特に話の筋は何もないと言っても過言ではない。このストーリーの軸の上に時々、登場人物それぞれの過去の犬エピソード(回想)が挿入される。この小話の演出が妙に凝っているため、この後の話の筋に流れ込んで一大ドラマが形成されるのかという期待を抱かせる。しかし実際、この小話は、話の筋になんら寄与しない。語られっぱなしである。はっきり言おう、全くこのシーンにあそこまで凝る必要はなかったし、言ってしまうと蛇足、いらぬ小話である。まあそう言って、小話を入れないと映画の尺が短すぎるのだろう、犬に追いかけられるだけの映画になってしまうから...。それでもスピルバーグの『激突』のように、筋としては単純でもあそこまでの緊張感と迫力を作り出すことができれば成立しただろうが、それだけの力量はこの監督にはなかった。はっきり言ってこの内容で映画にした意味がわからない。映画という芸術形式に耐えうるだけの内容ではない。

ここまで散々批判した。あえて今問おう、今尚この作品を映画として昇華させたその要因、映画の領域にかろうじて繋ぎ止めている糸はなんであるか。それは映画終了後のエンドロールの際に明らかにされる。

「愛犬のモリー、人生の師であり、友である君に捧ぐー」

多分、愛犬が亡くなったから、記念に一作撮りましたという感じだったのか。それに付き合わされた鑑賞者の身にもなってほしい。まさに犬好きの犬好きによる犬好きのための映画。よほど犬が好きでかつ、暇を持て余しているという2条件が重ならない限り、オススメはしない。

(予告編はこちらから)

<https://www.youtube.com/watch?v=Ng2LoD0-wOU>

抱きしめたいな、ガンダム！

中島瞭生(卒舎生)

昨年の夏頃のことであった。早朝から翌日昼過ぎまで休憩なしの重労働とパワハラセクハラなんでもござれという劣悪な環境で働いていたウチは、心身ともに疲弊していた。何もする気が起きない。何にも心が動かされない。たまの休日も、寝て起きてまた寝てと無為に過ごしていた。

そんなある日、Netflixでアニメをザッピングしていると、1本のタイトルに目が止まった。そう、『機動戦士ガンダム00(ダブルオー)』

である。他に観ようとしていた作品がなかったこと、以前知人に勧められたこともあって、早速ウチは視聴を開始した。

「ガンダム」の名を持つロボット兵器を用い武力行使によって戦争根絶を目指す、という矛盾を抱え、常に孤立無援の状況に置かれながらも、平和のために戦い続ける主人公らの物語を追っていくうちに、乾いていた心が潤いを取り戻していくのをウチは感じた。『00』は全50話を約3週間で完走した。劇場版Blu-rayも購入した。自分でも異例のことで驚いたのを覚えている。

流れるように『機動戦士ガンダムSEED』全50話も完走したウチの心に去来したのは
「全ての始まり『1st』を観なければ」

確固たる強い意志であった。

ここからウチの大きなガンダムマラソンが始まる。『機動戦士ガンダム』、『機動戦士ガンダムZ(ゼータ)』、『機動戦士ガンダムZZ(ダブルゼータ)』、映画『逆襲のシャア』、映画『機動戦士ガンダムF91』、『機動戦士ガンダムUC(ユニコーン)』、『機動新世紀ガンダムX(エックス)』、『新機動戦記ガンダムW(ウィング)』、『機動武闘伝Gガンダム』、『∀(ターンエー)ガンダム』、『機動戦士ガンダムAGE』、『ガンダム Gのレコンギスタ』、『機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ』……と、休みの日はもちろんのこと、出社前や就寝前など隙あらばひたすらガンダムを観る生活が続いた。(ここまであまりにガンダムの文字を打ちすぎてゲシュタルト崩壊した)

すると実生活でも不思議なことが起きる。

仕事内容も職場環境も相変わらず地獄ではあったが、視聴中の作品の続きや好きなキャラクターのことを思えば「OA後まで絶対生き延びてやる」と折れかけた心を持ち直すことができるようになった。なんというか、『00』視聴前の屍期間よりも心持ちが強くなったのである。

新たな作品に出会えたときの情熱や推しへの思いが大きな活力になる、ということは、これまでいろんな沼にハマってきたおかげでよく理解している。しかしガンダムシリーズには、「過酷な状況」に放り込まれた「若者」である今ハマったからこそ、他とは何か別な意味合いを持ったように感じている。

テレビ制作の現場は戦場だ。休憩どころか食事すらまともに摂ることができない。注意の域を完全に越え理不尽に浴びせられる罵声。二転三転する上司の無茶苦茶な発注に、目の前で行われる暴力を止めることもしない上層部。物理的に死ぬことこそなけれど、上は誰も助けてはくれず、ウチの精神と尊厳は常に満身創痍だった。

ロボット兵器ガンダムを中心に進む物語は、その多くが常に戦場と共にある。例えばアムロ・レイやブライト艦長などクルーの大半が若者の戦艦ホワイトベースは幾度となく激戦地に送られ(1st)、オルガ・イツカ、三日月・オーガスをはじめとする少年兵によって結成された鉄華団は、時代の流れや権力を持った大人の思惑に翻弄され壮絶な運命を辿る(鉄血のオルフェンズ)。過酷な状況下で孤軍奮闘し、心身ともに傷つき苦悩する彼らの姿に、ウチは強い共感を覚えた。

しかし、彼らには「ガンダム」がある。

ウチは彼らが羨ましかった。最強の兵器ガンダムの物理的な力を恣にしたかったというのもある(ウチもカミーユみたいに嫌な奴に向かってバルカン砲乱射してコックピットで高笑いしたかった)(暴力はいけない)。

だが物理的な力以上に、ガンダムを介し閉塞した現状や目の前の困難を打破しようとする彼らの心にウチは憧れた。

繰り返される悲劇に、「それでも」と言いながら人の可能性を心から信じ、それを示そうとするバナー・リンクス(UC)。どれほど窮地に追い詰められようとも、戦争のない世界への「変革」を諦めない刹那・F・セイエイたちソレスタルビーイング(00)。彼らの理想の実現にはガンダムは必要不可欠だ。だが、強い信念なくしてはガンダムなどただの暴力に過ぎない。

思うにウチはなりたかったのだ。彼らのような、想像を超える強大な力と、それを御することができる信念の持ち主に。

軽い気持ちで観始めたガンダムシリーズに、いつしかウチは自らの現状を重ね共感し、彼らのようにありたいと思うようになっていた。それがウチの心持ちを強くさせたのだと思う。刹那が0ガンダムに命を助けられたように、ウチもまたガンダムに救われたのだった。

おまけ

【Netflixで視聴できるガンダムシリーズベスト3】

1位 機動戦士ガンダム(1979)

- ・全てのガンダムの原点。
- ・全43話を追うのがダルいそのあなた、Netflixならテレビアニメの総集編である劇場版3部作が観られるぞ！

2位 機動戦士ガンダム00(2007～2008、2008～2009)

- ・「武力によって戦争根絶を目指す」とはどういうことなのか、ぜひ観てほしい。
- ・一人の脚本家が全編担当しているので、ストーリーやキャラ描写にブレがなく安心して観ていられる。
- ・グラハム・エーカーさんをすこれ。

3位 機動戦士ガンダムSEED(2002)

- ・記念すべき2000年代初ガンダムシリーズ。1話ラスト、硝煙の中から立ち上がるストライクは圧巻。

- ・前半を乗り越えた後半からの展開は本当に良い。
- ・全体的にモビルスーツがかっこいい。ところでSEEDには正式名称にガンダムとつくモビルスーツは存在しないのだ。

【個人的に好きなガンダムシリーズベスト3】

1位 機動新世紀ガンダムX(1995)

- ・放送期間短縮の憂き目に遭いながらも、物語にしっかり決着をつけられているのがすごい。
- ・ストーリー構成、演出が素晴らしい。特に1話サブタイトル回収からの2話への展開は秀逸の一言に尽きる。
- ・明るく前向き、頭も切れるし想いを寄せるティファのためならなんでもできるガロード・ランは最高の主人公です。

2位 機動戦士ガンダムUC(テレビアニメ版 2016)

- ・初見で観るもよし、宇宙世紀シリーズの知識があるとさらに面白いという、新規にも古参にも嬉しい作品。
- ・キャラクター、モビルスーツ共々全編作画が良い。澤野弘之さんの劇伴も相まって観る価値はめっちゃくちゃある。
- ・自信がないときにアニメ終盤を観ると、「もうちょっと頑張ってみるか」と元気が出てくる。

3位 機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ(2015～2016、2016～2017)

- ・オルガや三日月のいた環境が職場すぎて泣いた。多分一番主人公サイドに共感した作品。
- ・最近の作品ではあるが、実は結構『1st』のオマージュが見られる。まさか『1st』の推しそっくりさんに出会えるとは思わなかった。
- ・モビルスーツがかっこいい。一番かっこいいのはガンダムキマリストルーパー。足が4つある。

【好きなモビルスーツベスト3】

1位 シナンジュ(機動戦士ガンダムUC/搭乗者 フル・フロンタル)

- ・一番美しいモビルスーツだと思っている。ぜひ検索してみてほしい。
- ・機能性重視のMSを赤く塗りさらに装飾を施すところに、ジオン残党の偶像たる乗り手の姿を反映しているのが感じられて良い。

2位 ガンダムキマリストルーパー(機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ/搭乗者 ガエリオ・ボードウィン)

・変形して足が4本になったのを観て、リアタイ時テレビの前で「かっこいいーーーー！」と叫んだ思い出がある。

・推しの機体。推しが乗っている。

・末路に泣いた。

3位 ザク(機動戦士ガンダム)

・やっぱりザクが好き。ジムよりザク。

・やられ役だし作りもシンプルなのに、なぜか心惹かれる。

・頭が丸くてかわいい。

【3大紫髪ジオン軍将校】

○ガルマ＝ザビ(機動戦士ガンダム)

・『1st』最大の推し。ジオン公国を支配するザビ家の御曹司。美青年。

・心優しく少々ナイーブ、人を疑うことを知らない性格。育ちの良さが見える。

・家柄ではなく実力で功績を上げようとする。えらい。

・父親には溺愛され、敵地である地球の住民ともうまく交流しているなど、人に好かれる才能の持ち主。最高。

・あのシャア・アズナブル唯一の友人。みんな安彦良和御大の『機動戦士ガンダム THE ORIGIN』11巻を読んでください。またはOVA『機動戦士ガンダム THE ORIGINⅢ 暁の蜂起』を観てください。

・その親友シャアに謀殺される(かわいそう)

○マシュー・セロ(機動戦士ガンダムZZ)

・「ネオ・ジオンの騎士」。とても顔がいい。

・ネオ・ジオンの摂政ハマーン様に心酔しており、彼女からもったバラの花をコーティング処理し常に持ち歩いている。かわいい。

・ことあるごとに「ハマーン様のお言葉」を思い出しては悦に入ったり、ハマーン様のため功を急ぎトンデモないことをやらす愉快な2.5枚目。

・途中から出番が減り、37話で再登場したと思ったらいつの間にか強化人間に改造され、知らない間にコロニー落としの戦犯となっていた。ウチは泣いた。

○アンジェロ・ザウパー(機動戦士ガンダムUC)

・ネオ・ジオン残党軍「袖付き」所属。「袖付き」代表フル・フロンタルの親衛隊隊長。

・妖しいほど美しい容姿の持ち主(原作の人物紹介から引用)

・フロンタルを信奉しており、ジオンのミネバ姫からも「危険な男」と称される。フロンタルが関心を持つバナージには反感や嫉妬などが入り混じった憎悪を向ける。

・愛機は「ローゼン・ズール」、フロンタルの机にバラを生けるなど、バラに縁がある男。美しい。

・アニメではフロンタルの狂信者っぷりに驚くが、原作小説で語られる彼の過去は重く悲しい。

……、とここまで色々書いたが、実はまだ全てのガンダムシリーズを観終えたわけではない。『機動戦士Vガンダム』はまだ途中だし『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』もほとんど手をつけていない。『機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY』も完走まであと2話残っている。とにかくガンダムは映像作品が多いのだ。

それにガンダムの魅力は映像作品だけではない。ガンダムのプラモデル、通称「ガンプラ」も奥深く、とても楽しい娯楽だ。これを書いている机の上にもこの間作ったザクが載っている。つまりウチもハマってしまっているのである。

広大な世界観に、多岐に渡るコンテンツ、当分はウチのガンダムフィーバーは冷めなさそうだ。

こんな駄文を読む人がいるかどうかは分からないが、読んでちょっとでもガンダムに関心を持った人、元からガンダムを知っていた/好きだった人がいたらぜひお話がしたいです。

第7号目次

「コスパ野郎」に立ち向かう 一郡司ペギオ幸夫『天然知能』を読んで(遠藤愛明)	1
郡司ペギオとタンポポの冠毛(フラハティ陸)	2
ニーバー『光の子 闇の子』を読んで(遠藤愛明)	4
2020年度読書会ラインナップ(学生委員)	5
建築学生の作品紹介「資料室に籠って作っているものとは」(菅家結)	7

今年10戦10敗なのよね。今のところ。この前の晩の話。(三木遼大)	13
園芸・建物修繕計画についての報告(松村いつみ)	14
連載トラッシュムービー①(鶴田賢一郎)	16
抱きしめたいな、ガンダム！(中島瞭生先輩)	18

編集後記

今回は3月中に発刊することが出来て良かったです。4月からも一層コンテンツを充実させていきたいと思います。あと、ホラー連載は次号で書きます。(編集部S)
皆様のお陰で充実の度を増しているZoe。今後とも共に盛り上げていきましょう！(編集部E&F)